

単元を貫く「リアルな問い」で 学びの楽しさや価値に気付かせる

佐賀県小城市立三日月中学校

学びの楽しさや価値を実感することが、生徒を主体的な学びへと誘う——。小城市立三日月中学校は、こうした考えの下、社会や学問と結び付く問いの設定、生徒同士の対話を促す学級づくりを行う。全教科で授業改善に取り組む中で、安易に答えを求めず主体的に問いに取り組む姿が増えている。

● 取り組みのねらい

「ひらかれた学び」が
生徒の主体性を引き出す

小城市立三日月中学校は、2011年度に佐賀県の教育課程研究推進校の指定を受け、2年間にわたり「学びをひらく授業の創造」の研究に取り組んできた。研究の原点にあるのは、「学びとは何か」「なぜ人は学ぶのか」という根源的な問いだ。学ぶのは「みんながしているから」「高校受験があるから」だけではない。「もっと知りたい、考えたい」という思いが生徒を自律的な学びへ誘うのであ

り、「分かった」時の生き生きとした顔が教師に教える喜びを感じさせる。

こうした真の学びを追究するために、生徒と教師が協働しながら学びの楽しさを実感できる授業を創造することが研究の目的だ。研究主任の真子靖弘先生は言う。

「取り組みの根底にあるのは、自律した生徒に育ってほしいという思いです。そのためには、教室という限られた環境の中だけで授業を完結させるのではなく、授業が終わった後も題材について考え続けたり、学んだことを基に社会の課題について考えたりする姿勢を養うことが大切だと考えました。このよう

School Data

◎1947（昭和22）年開校。佐賀駅の北西にある小城市の田園地帯に位置する。教育目標は「社会に生きる知恵と力を身に付けた、心豊かな生徒の育成」。2012年度は「学びをひらく授業の創造」を研究テーマに掲げている。



校長◎渡瀬浩介先生

生徒数◎497人 学級数◎15学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒845-0021 佐賀県小城市三日月町長神田 1650

TEL◎0952-73-2016

URL◎<http://www3.saga-ed.jp/school/edq11051/>

公開研究会◎未定

な状態が『学びがひらかれていく』ということとであり、その中で生徒は学ぶ楽しさを実感し、自律的・能動的な姿勢を身に付けていくのだと思います」

取り組みの背景には、もう1つ、生徒の気質に対する懸念があった。真子先生は、「生徒は素直すぎて疑うことを知りません。それが長所でもあり短所でもあります」と評する。教師の言葉を受け入れる半面、教師から「ひよっとして違うのでは？」と問い返されると動揺してしまうというのだ。

「教科書にはこう書いてあるけれども、本当にそうなのか。物事を批判的な目で見て、

主体的に取り組む言語活動の工夫

別の方法や考え方があっていいかと思われ、育てなければと思えます」

●活動の工夫①

「他者とかかわりながら」「リアルな問い」を追究

「学びをひらく」手段として、研究の柱の1つに据えられたのが「リアルな問い」の設定だ。教科書の問いと違い、社会や学問における問いは正解が1つとは限らず、また正解がないこともよくある。こうした「リアルな問い」を全ての教科で設定し、生徒に取り組みさせることで、学ぶ意味や価値、必然性を感じさせようとしている。

「リアルな問い」は「実社会・実生活に則した問い」と「アカデミックな問い」の2つに大別し、前者は「身近な材料で今までにない電池をつくれるか」（理科）、「ボウリングに行くにはどうしたらよいか」（特別支援教育）といった学習が生活にどう役立つのかを問う内容としている。後者は、「卑弥呼は魏からもらった銅鏡100枚を何に使ったのか」（社会）というように、学問的に解明されていない真理を探究するものとしている。

2つめの柱は「他者とかかわり」だ。この他者とは、「友だち、教師、教材」を指す。「一斉授業は効率的に知識を習得する上では有効ですが、他者と意見を交わしながら、物事を多面的に吟味することには向いていま

せん。他者との対話はそれ自体が面白さをもっているだけでなく、思いもよらない新たな発想や考え方を生み出すこともあります。実社会や学問の世界とのつながりを感じながら対話を繰り返すことで、生徒の学びはひらかれたものになっていくのです」（真子先生）

●活動の工夫②

カリキュラムモデルで教科間の共通理解を得る

研究組織は、校長、教頭、研究主任、研究副主任、研究推進委員による「研究推進委員会」と、その下の「授業づくり研究部会」「学級づくり研究部会」から成る。授業づくり研究部会は「リアルな問い」の創造、問いを追究するための言語活動の具体化、評価方法の開発など、学級づくり研究部会は授業中の対話を促すための学級づくりや教室環境のあり方が、研究テーマだ。メンバーは前者に各教科主任、後者にそれ以外の教師が当てられた。研究に際し、まず教師が戸惑ったのは、リアルな問いの設定と、それに基づく授業計画の立案だった。研究副主任で数学科担当の原渉先生は、次のように明かす。

「私自身、これまでは限られた時間の中で、教科書の内容を最後まで、生徒にいかに分かりやすく説明し、理解させるかを考えて、授業の手順や説明の仕方を工夫してきました。しかし、なぜ学ぶのかといった根源的な問い



小城市立三日月中学校校長
渡瀬浩介 わたせ・こうすけ
「生徒、卒業生にとって、いつも人間味のある教師でいたい」



小城市立三日月中学校
真子靖弘 まなこ・やすひろ
研究主任。社会科担当。「創造的に考えることを、自分自身にも生徒にも求めている」と



小城市立三日月中学校
原渉 はら・わたる
研究副主任。数学科担当。「自分の考えを持ち、将来や夢を自分自身で決められる生徒を育てたい」



小城市立三日月中学校
野中裕恵 のなか・ひろえ
特別支援教育担当。「笑顔で成人式に出られるような、地域でしっかりと生きていける生徒になってほしい」

を考え、教科と生活を結び付けたことがなかったので、研究主題を示された時は正直、戸惑いました」

これは原先生だけでなく、多くの教師の実感でもあった。そこで、全教科が共通認識をもって取り組むために設定されたのが教科共通のカリキュラムモデルである（P.12 図1）。授業づくりの手順は、次の通りだ。①「リアルな問い」を1単元につき1つ設定し、②他者との対話を通して基礎的・基本的な知識・技能を習得しながら「問い」について考える。③「問い」に対して自分なりの答えを出しな

*プロフィールは2013年3月時点のものです

図1 「学びをひろく単元カリキュラムモデル」

①リアルな問いの共有化

教師もしくは教師と生徒が、単元を貫くリアルな問いを設定する。
「なぜなんだろう？ 自分なりの答えを見つけ出したい！」
「この問いの答えを見つけ出すために、これから単元の学習がはじまるんだな」

②リアルな問いの探究

教える過程 リアルな問いの解決に向けて、他者との対話を通して、基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る

基礎に降りていく学び 広がっていく学び

考えさせる過程 リアルな問いの解決に向けて、他者との対話を通して基礎的・基本的な知識・技能の活用を図る

③学びの広がり

リアルな問いに対し、自分なりの答えを出しながらも、教室外でもよりよい答えを求めて、関心を持ち続ける

*同校の資料を基に編集部で作成

図2 2年生・数学 連立方程式のワークシート

2章 連立方程式 No.2

『連立方程式は実生活に役立つ場面はあるのか？』

2節 連立方程式の利用

「2012年 J1(18チーム)リーグ戦」ルール
全34試合で勝ち点を稼ぐ。
-勝ちチームに、3点。 -引き分けは、両チームに1点。 -負けチームには、得点を与えない。

【みんなで考えよう】☆ 摩正和の予想が正しい☆
サガン鳥栖の2012年シーズンの勝ち点は、全34試合で勝って57点であった。引き分けの回数と負けの回数が同じであるなら、サガン鳥栖の勝った回数は何回でしょうか？

③文字を2つ使って考えてみよう！！

勝った回数をxとすると、引き分けの回数をyとすると、

$$\begin{cases} 3x + y = 57 \dots \text{①} \\ x + 2y = 34 \dots \text{②} \end{cases}$$

$(x, y) = (16, 9)$

☆①文字を使わなかったとき、②文字を1つ使ったとき、③文字を2つ使ったときで、どのときの考え方が分かりやすかったのでしょうか？その理由も書いてみましょう。

文字を使わなかったときと文字を1つ使ったときより、文字を2つ使ったときの方がよかったです。なぜなら、①、②は予想としていかなかったという感じがして、たくさん考えた方がいいから。しかし③は、2つの文字を使うことで簡単にできたからです。

今、習っている連立方程式が使えたら簡単にできたから/わかりやすかった。

★これからも連立方程式が実生活に役立っている場面があるかを考えていきましょう！！

数学の連立方程式のワークシート。連立方程式の「よさ」を実感させるという目標の下、生徒にとって身近な地元のサッカーチームを題材にした
*同校の資料をそのまま掲載

がら、なおも関心を持ち続けて、よりよい答えを探し続ける。

カリキュラムモデルには、教科特性によって必ずしも合致しない部分もあった。例えば、理科の教師からは、理科では1単元が長いという指摘があった。また、数学では、最初にある程度知識の習得が必要であるため、問いについて考える時間を多く取れないという問題を抱えていた。

そうした意見に対し、真子先生の示した方針は「出来ることから取り組もう」だった。

「カリキュラムモデルはあくまで見本です。それぞれの教科特性を尊重し、授業を進める

中で改善を施せばよいのです」（真子先生）

理科では、1単元の中に更に細かく単元を設定し、それぞれについて問いをつくった。数学では、単元の途中や最後に、問いについて考えさせる時間を設けた。例えば、2年生の連立方程式では「連立方程式は実生活に役立つ場面はあるのか」という問いを設定し、地元のサッカーチームの試合を題材に用いた。「サガン鳥栖に全34試合で勝ち点57を挙げてほしい。引き分けの回数と負けた回数が同じなら、勝った回数は何回か」という問いを、連立方程式を使って実践させた(図2)。

また、特別支援学級では、言語活動の定義が問題になった。特別支援教育担当の野中裕

恵先生は次のように語る。

「特別支援学級の生徒は言語活動自体が難しいのであれば、ノンバーバルなコミュニケーションも含めて表現活動と捉えてよいのではないかと、真子先生が言われました。書くことや話すこと自体を目的とせず、生徒が正しく自分自身を表現できる力を育てるために何をすればよいのかを考えるきっかけになりました」

このようにして試行錯誤を進める中、教科特性に応じて出来ることをやっていこうという意識が広まり、各教科の指導案も徐々にレベルの高いものに結実していった。

「先生方には県教委の指定を受けた以上、

主体的に取り組む言語活動の工夫

研究を成功させなければいけないという思いがあります。それに対して、私は『大いに失敗しましょう』と言ってきました。研究発表会があるから、報告書をまとめないといけないから、研究をするわけではありません。結果よりも、教師が生徒のために考える過程そのものが大切なのです」(真子先生)

●活動の工夫③

他者を受け入れる学級風土が生徒同士の活発な交流を促す

授業で生徒同士の活発な対話を促すには、良好な人間関係、他者の考えを受け入れる学級風土が重要になる。学級づくり研究部会では、言語活動の質を向上させるための学級づくりの研究を重ねた。

生徒が協働して取り組む雰囲気を培うために、朝の会で行っているのが「リレーションタイム」だ。生徒がペアまたはグループになって、対話やスピーチをするというものだ。例えば、ペアで会話をする時は、座席が隣り合う2人が話し役・聞き役に分かれて1分間ずつ話す。聞き役の子は、相手が話し終わるまで顔を見ながら静かに話を聞き、話が終わったら質問や感想を述べる。テーマは「最近のニュース」「将来の夢」など、日直の生徒が設定する。また、1分間スピーチでは、1回に2人の生徒があらかじめ用意した原稿を基に、学級全員の前でスピーチする。終了

後、聞き手は拍手し、数人が感想を述べる。内容に関する批判はしないのが約束だ。

リレーションタイムは、クラスによって温度差があり取り組みが深まらなかったという反省もあるが、一方で予想以上の効果もあった。生徒会の提案により、13年度から生徒が主体となって取り組みを推進することになったのだ。ゲーム的要素を入れるなど、楽しみながら取り組めるプログラムを生徒会が提案し、内容をより深化させていくという。

●活動の成果

生徒も教師も学び合う雰囲気生まれる

2年にわたる研究は、同校に多くの成果をもたらした。1つは、どの教科も生徒の興味・関心を高める「リアルな問い」を創造できたことだ。渡瀬浩介校長は、その背景として次のことを強調する。

「研究主任の真子先生がトップダウンで指示を出すのではなく、先生方全員が意図を理解し、納得するまで次に進みませんでした。また、どれだけ手間がかかろうとも、先生方が納得するに足る資料を準備し、丁寧に説明しました。常に先を見通して、そこに至るまでの道筋を示し続けたことも、先生方に安心感を与えたはず。一方、原先生は他の先生方の『分からない』という声を代弁して、真子先生との懸け橋となりました。2人

のそうした役割が、取り組みを成功させる原動力になったと思います」

何よりの成果は、他者との対話を楽しみ、そこに価値を見出す生徒の姿だろう。仲間とのコミュニケーションを通して考えが深まり、新しいアイデアが生まれることを実感する生徒が増えると共に、生徒の他者理解が進み、互いを認め合う雰囲気生まれている。教師の間にも、学び合う風土が醸成されつつある。

「問いの設定や指導案の作成まで、真子先生の社会科が常に先行してモデルを示してくださったのが大きかったと思います。社会科がそうなら数学はこうしようというように、自分の教科に置き換えて考えることが出来ました。教師同士で切磋琢磨する中で、教科の壁を越えてより良い方法を学び合おうとする雰囲気が醸成されたと感じます」(原先生)

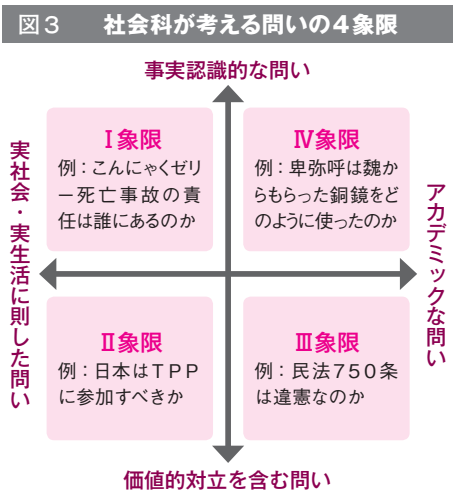
一方、課題もある。一つは、生徒の学力面の向上を定量的に測る評価指標の開発まで至らなかったことだ。「取り組みを教師の自己満足で終わらせないためには、入学時と卒業時の生徒の成長を見取る手立てを考える必要があります」と渡瀬校長は自戒する。

最も大きな課題は、13年度以降も取り組みを継続することだ。研究推進校指定終了後も、これまで通りに教師の意欲を維持し、取り組みの質を更に高めることが出来るのか。同校の取り組みはこれからが正念場となる。

問いの設定から討論まで 生徒主体で授業をつくり上げる

**4象限の問いで広い視野と
多様な価値観を学ぶ**

社会科では、「社会のより良いあり方を考え続ける生徒」の育成を目標に掲げ、「学びをひらく授業の創造」の研究に取り組んできた。教科共通の方法として、「リアルな問い」と「アカデミックな問い」に分けているが、社会科ではこれに「事実認識的な問い」と「価値的対立を含む問い」を加え、この4象限で問いを設定している(図3)。事実認識的な問いは歴史的・社会的事象について複数の結論が導き出される問いで、価値的対立を含む問いは



*同校の資料を基に編集部で作成

価値観や利害の対立によってもたらされる考
え方の相違を論じるものである。
「客観的な事実からさまざまな見方、考え
方ができると知ること、生徒は社会的事象
に対する興味関心を高め、より幅広い視野や
多様な価値観、バランスの取れた社会認識の
あり方を学ぶのです」(真子先生)

①「リアルな問い」の共有化 生徒の声から「問い」を設定

「アメリカ合衆国は世界のリーダーとして
ふさわしい国なのか」という問いを例に、授
業の進め方を見てみよう(図4)。授業は、
生徒と教師が「リアルな問い」を設定するこ
ろから始まる。問いを設定する上で、真子
先生が意識しているのは次の3点だ。

- ① 単元で習得させたい内容から帰納的に問いを創造する
 - ② 生徒の常識を揺さぶったり疑問を抱いたりする問いになっているかを考える
 - ③ 新聞やニュースに問いづくり役に役立つ情報がないか、日頃からアンテナを張っておく
- 問いの設定は次のように行われた。まず真子先生が宗教問題やエネルギー問題、地球環境問題などのグローバルな課題を紹介し、世

界の国々が協力しなければ解決が難しい問題であるという共通認識を持たせた。その上で「各国の協力を引き出すためにリーダーシップを発揮すべき国はどこか」と問い掛けたところ、生徒は「中国」「アメリカ」「日本」と発言した。次に、それぞれの理由をグループやクラスで話し合い、アメリカ合衆国に集約されたところで前記の問いが設定された。

②「リアルな問い」の探究 教師は「コーディネーター」役

次は「リアルな問い」の探究である。「知識は物事を習得する過程で習得される」という考えで、真子先生は基礎・基本を習得するための探究の過程をこう設定している。

- ① 単元の基礎的知識を問う一問一答形式の学習プリントを、教科書や資料集で予習させた上で、教師がポイントを解説
 - ② 身に付けた知識を基に生徒同士の対話を盛り込みながら内容の習得を図る
 - ③ 学習プリントの内容に該当する問題集を解いて復習を行う
- 問いを深めるために特に重視するのが討論会だ。肯定側・否定側が習得した知識や補助資料を使いながら、それぞれリアルな問いに対する主張文を作成して臨む。
討論会は生徒を入れ替えて2回行う。最初に肯定側10人、否定側10人、その他20人にジャッジや司会、板書を行わせ、2回目に入

主体的に取り組む言語活動の工夫

れ替えるのである。これによって、出来るだけ多くの生徒が発言する機会を確保する。

この単元の討論会は、アメリカの自然や産業、文化など基本事項について一斉授業で学ばせ、問いに対する自分なりの考えを持たせた上で、アメリカのリーダーとしての資質について意見を交わした。肯定側は「農産物の生産量・輸出量が世界一」「世界一の軍事力」を、否定側は「自分勝手な国」「貧富の格差が激しい」などの立論を掲げ、「世界各地の米軍基地の存在」や「銃の所持」などの是非をめぐって反論を展開した。

真子先生は生徒の討論を聞きながら、時折「今の反論はおかしいよ」「最後まで聞いてください」などと注意し、時に脱線しがちな議論の軌道修正をする。この間、先生自身が考

ますので、無理に議論を止めたりはせず、ある程度自由に話させます。生徒や学級の実態、討論の状況に応じて、議論が深まるように導くようにしています」（真子先生）

**③学びの広がり
授業後も探究し続ける生徒たち**

討論後は、真子先生が討論を総括して足りなかつた部分、深めたかつた部分を整理した後、生徒が肯定・否定の立場を離れて、「アフターシート」にアメリカの国家としての特色を踏まえつつ、リーダーとしての適性について自分の考えをまとめた。

「立論よりも踏み込んだ内容を書く生徒が増えたことは、大きな成果です。また、授業後の休み時間まで討論の内容について『こん

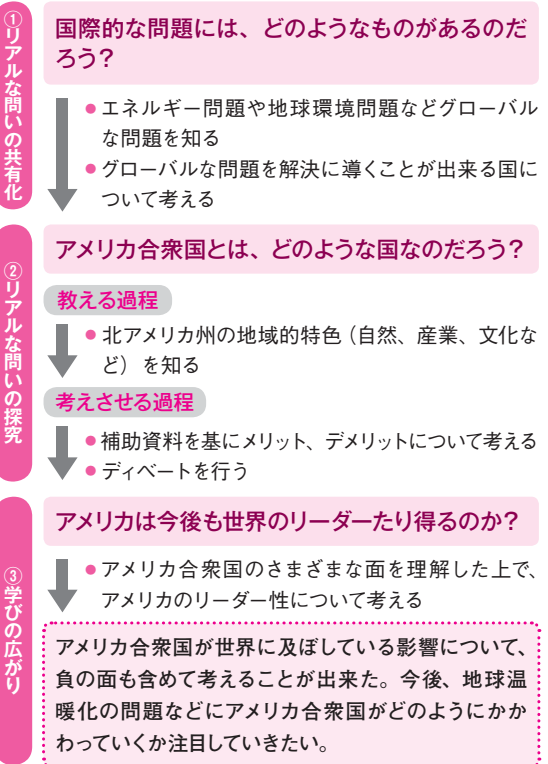
えを述べることはなく、あくまで討論のコーディネーター役に徹する。」

「議論を整理する際は、どこまで流れに任せるか、どこで引き戻すかという点に留意しています。1年生のうちには発言が楽しいと思ってくれればよいと考えています。」

卒業生への追跡調査も行っている。ここには、「高校の社会はあまり楽しくありません。先生の講義を受けるだけなので、自分から学ぶ感じがしません。三日月中時代の討論会の存在の大きさを感ずります」という声が寄せられた。真子先生の授業をきっかけにして、社会のあり方に関して関心を持ち、自分なりの考えを見出し出すとする生徒が現れている。

「今後は、基本事項を出来るだけ網羅した問いの設定、立論や議論の質を高める工夫を重ね、生徒が学びの楽しさを感じられる授業づくりに一層努めていきます」（真子先生）

図4 1年生・社会「北アメリカ州」での指導例



*同校の資料を基に編集部で作成

えを述べることはなく、あくまで討論のコーディネーター役に徹する。」

「議論を整理する際は、どこまで流れに任せるか、どこで引き戻すかという点に留意しています。1年生のうちには発言が楽しいと思ってくれればよいと考えています。」

卒業生への追跡調査も行っている。ここには、「高校の社会はあまり楽しくありません。先生の講義を受けるだけなので、自分から学ぶ感じがしません。三日月中時代の討論会の存在の大きさを感ずります」という声が寄せられた。真子先生の授業をきっかけにして、社会のあり方に関して関心を持ち、自分なりの考えを見出し出すとする生徒が現れている。

「今後は、基本事項を出来るだけ網羅した問いの設定、立論や議論の質を高める工夫を重ね、生徒が学びの楽しさを感じられる授業づくりに一層努めていきます」（真子先生）

実生活に根ざした「問い」で 自立した大人を育てる

**労働の意義を学ぶ体験学習で
生徒の主体性を引き出す**

「今日はお金の学習です。先日の校外学習でいくら使ったのか、レシートを基に計算してみましよう」と、野中先生が問い掛けると、生徒は手元の封筒からレシートや残金を取り出し、計算機を使って熱心に計算を始めた。早めに計算を終えた生徒が、終わっていない生徒に声を掛ける姿も見られる。

特別支援学級では、社会と結び付いた「リアルな問い」を重視する。特別支援学級の目標は、個に応じた自立と社会参加を果たす力の育成だ。元々、生活で生きる学習が基本であるため、「リアルな問い」の設定はそれほど難しくないと、野中先生は言う。

「特別支援学級では、生徒の実態や目標に応じて、ある程度自由に単元を組み立てられます。生徒の多くは、小学校まで周りの友だちからしてもらったことが多い立場でした。主体的な活動が苦手なので、意欲的に参加できるように問いを設定しています」

学びの中心は販売学習と校外実習だ。生徒が製作した手芸品を自分たちで販売し、その売り上げで新学期に必要な物品を購入する。

図5 校外実習の流れ

- ①作業学習…手作りの巾着袋やランチオンマト、マスクなどの縫製製品を製作。
- ②販売実習…スーパーマーケットの一角を借りて自作製品を販売。
- ③調べ学習…販売実習で得た収益で新学期に向けて必要な物品を購入。事前にショッピングモールまでの行き方、ショップでの購入方法、お金の計算方法などについての調べ学習を行った。
- ④校外実習…生徒の力だけで公共交通機関を使ってショッピングモールに行き必要な物品を購入。
- ⑤振り返り…校外実習の収支計算、実習の感想文の作成と発表を行った。

*同校の資料を基に編集部で作成

校外学習の目標や感想などの作文を書いて

**スピーチの経験を通して
コミュニケーション力を育む**

労働と収入の関係を学び、働く意義や地域社会で生きることを実感させる(図5)。作業学習で商品製作は行っていたが、新たな要素の1つとして作業日誌の作成を取り入れた。「生徒は思いを言葉で整理することが苦手です。何でも『楽しかった』『面白かった』でまとめる傾向があります。作業直後に取り組みを振り返り、何が楽しかったのか、どのように難しかったのかを一文でもよいので書くことを継続させました」(野中先生)

発表する、週3回のスピーチも取り入れた。スピーチが一方的にならないよう、聞き手が質問や感想を述べる時間も設けた。「スピーチで良かったところを言ってください」と野中先生が問うと、指名された生徒は、「ハキハキと声が出ていた」「具体的で分かりやすかった」とたどたどしくも大きな声で答えた。「仕事では、人の指示を聞いたり助けを求めたりする場面はたくさんあります。自分の考えを人に伝える、相手の話を聞くといい経験は、生徒の自立に必要なのです」(野中先生)

生活に結び付いた「リアルな問い」を追究する中で、生徒は自分を表現する力を高めていく。始めは思うように書けなかった作業日誌だが、前回と比較して良かった、悪かったと客観的に評価できる生徒も現れた。また、記録を残すことで新たに出来るようになったことが見えやすくなり、自己肯定感を育むことにもつながっている。スピーチでも、最初は内容と無関係な質問をする生徒もいた。しかし、よく聞き、発表の内容や話し方などについて述べるよう繰り返し指導することで、的を射た質問が出来るようになっていく。

「生徒は一連の学習を通して自分も出来る」と自信を深め、雰囲気明るくなりました。生徒はいつかは自立して、地域の一員として生きていきます。この学びを生活に生かして、自分らしい自立と社会参加を楽しめる大人に成長してほしいと思っています」(野中先生)